

英国長老派教会資料中の台湾関係資料について

三澤真美恵

台湾史・中国語圏映画史を専門とする関係から、ここ数十年は旅先といえどもつばら東アジアが中心だった。だが、そうした自分の立ち位置を少し離れた場所から見直したいという思いもあり、勤務先の海外派遣研究員制度では二〇一一年四月からの半年間英国ロンドンに滞在した。そこで、本稿ではその間に閲覧する機会をえたロンドン大学SOAS (School of Oriental and African Studies) 図書館が保管する Missionary Collection のひとつ「Presbyterian Church of England Foreign Missions Committee」(以下PCE/FMC)から台湾史に関わる資料を、断片的にはあるがいくつか紹介してみた。Presbyterian Church of England

すなわち英国長老派教会は一八四三年に Foreign Missions Committee (以下FMC) を設置した (<http://www.soas.ac.uk/library/archives/collections/missionary-collections/>)。その主要な活動地域は中国で、台湾には一八六五年に宣教師が派遣されており、各地の覚書や報告書、英国本部との往復書簡等は布教地域毎に分類され保存されている。今回閲覧したなかで視覚的に最もインパクトがあったのは「台湾民主国」が英国籍「教士」に発行した通行証である (PCE/FMC/2/02/06)。和紙で言えば半切ほどの大きさがあり(同じファイルには清国政府の天津税関が発行した護照もあるが、こちらは半紙をや

や幅広にした程度のサイズ)、印刷された文言の一部に墨と朱による手書きの文字が加えられている。「台湾民主国」とは下関条約によって台湾が清国から日本に割譲されることを知った台湾の士紳階級が日本による支配を逃れようと企図し、巡撫であった唐景崧を総統として建国された。住民による独立建国という歴史的な意義は大きいものの、日本軍による植民地征服のための侵攻により事実上きわめて短命に終わった。それだ



けに、組織的にも脆弱であったはずの台湾民主国が清朝政府と同様に、まがりなりにも印刷技術（大量複製を可能にする）を用いた通行証を発行していたことに驚かされた。また、外国人宣教師にこうした通行証を準備したという行為に、当初から自力での独立を目指すというよりは独立国の体裁をとることで諸外国による助力を得て植民地支配を逃れようとしたという先行研究の指摘が想起され、当時の台湾住民の国際的バランス感覚を垣間見た思いがした。

同じく一九世紀台湾の状況を伝える資料としては、台湾に派遣された女性宣教師が本国に書き送った書簡類もまた興味深い。一通ごとに十数枚にも及ぶ手書きの書簡には、教育や医療の成果とともに、「キャンドルも溶けるほどの暑さでやっつけられない」というような苦情が延々と述べられている。母国を遠く離れ、困難のなか

で布教活動にあたる一人の女性としての信仰への思い、逡巡、矛盾もろかがわかる。一九世紀の英国では女性の普通選挙権を求める運動も行われていたというが、それはまた女性がいまだ男性と同様の政治的権利を持つことが「普通」ではなかった時代であったことを示す事実でもある。たとえば、英国初の女性医師となったエリザベス・ガレット Elizabeth Garrett Anderson（一八三六一一九一七）は、女性参政権獲得運動のリーダーとしても知られる。彼女は、自身が医師となる過程で多くの偏見や嫌がらせに遭い、それゆえに後身を育てるべく女性医師が働くことのできる病院 The New Hospital for Women を建設したという逸話もある。彼女が建てた病院は現在も当時の面影を残す形で再利用され、建物の一部は彼女を記念する展示スペースとして公開が予定されている (<http://www.unison.org.uk/newbuilding>)。筆者



はロンドン大学歴史学研究所 (Institute of Historical Research) が実施していた研究者向けの視覚史料トレーニング・コースの一環として、準備中の展示スペースを訪ねる機会を得たのだが、その展示資料から同病院で研修を受けた女性医師や女性看護師のなかには宣教師として海外に出た人もいたことを知った。また、壁に掛けられた写真には植民地から研究に來ていたと思われるインド系女性の姿もあった。当時の男性医師のなかには、女性医師の進出を好ましく思わない人も多く、医者をや

たいなら自分たちの目の届かない周辺に植民地でやればいい、というような議論もあったという。だとすれば、植民地は宗主国のマイノリティが本国で果たせない活躍が可能な場所としての意味もあったのかもしれない。そうしたマイノリティの自己実現が「文明化の使命」としての伝道（それが帝国主義の拡張と連動していたことはしばしば指摘される）と結びつくような側面も存在したのだろう。ちなみに、英国長老派教会に Women's Missionary Association (WMA) が設置されたのは一八七八年だが、一九二五年に WMA が FMC と統合されてからは女性たちにも男性と同様の教会内での代表権が与えられたという。

また、視聴覚メディアに関する筆者自身の関心に即していえば、彼らミッションナリーが創設した台南長老女学校の開校五〇周年記念冊子『燈』（一九三七年）に集められた卒業生の回想録にある以下のような文言が目を引いた。「五〇年前のこの二月一四日に我が母校は開校の式を挙げました。場所は現今の女子神学校のところで、来賓も鮮なく、主として宣教師の方々でありました。式中に使用していたオルガンは非常に珍しく聴かれました。尚その晩は幻灯などがあつたが、その映画に就いては記憶が無い。ただマリヤがキリストを懐いている絵を見たことだけを憶えている。その時会場一同は思わず賛美歌（馬槽の）を謳って、之に和したのであります」（高金聲氏夫人「五〇年前の母校について」『燈』四頁。PCE/FMC/6/01/62）。

一八八七年の段階で「幻灯」が観られていたことは、筆者の初めて知る事実であった。しかも、それが宗教的效果として使用されていたことが興味深い。教会におけるステンドグラスが差し込む太陽光によってきらめく鮮やかな色彩で識字技術をもたない大衆に聖書の内容を感動とともに伝えるものであったように、一九世紀の台湾には宗教的な共同体験の仕掛けとして幻灯が持ち込まれていたのである。暗闇の中でスクリーンに映じた光を通じて「神の子」の姿を観た瞬間に思わず賛美歌を唱和し



たという表現に、初めて「幻灯」を観た人々の感動がいかに大きかったかが伝わってくる。これは、後に植民地宗主国となる日本に先駆けて、多くの科学技術が宣教師らによって台湾に入っていた事例のひとつといえよう。同時にその科学技術が布教活動に使用されていたことは、日本の植民地統治期に総督府が台湾各地で映画という科学技術を用いて天皇の姿を見せて回ったことと重なる部分があるように思う。駒込武によれば、日本の植民地では天皇崇拜がキリスト教の代用品として国民統合の「機軸」の役割を果たしたという。だが、同時に「欧米帝国主義の担い手は、「白人」「非白人」というレイシズムに基づいて峻厳な差別を実践しながら、キリスト教の擬似的「普遍性」に依存することで差別の過酷さを隠蔽することが可能だった」のに対して、「普遍」を標榜するキリスト教へ

の防衛的な反応として天皇崇拜が形成された「日本の場合はこちらの使い分けは難しかった」（『日本の植民地支配と近代』『別冊 思想／トレイシーズ』九二五号、一八一頁）。そうであればこそ、総督府にとつては「普遍」を具現する科学技術であり、視覚メディアでもある幻灯や映画は、宣教師にとつて以上に重要であったともいえよう。

PCE/FMCの資料を読んでいると、一九世紀清朝期の台湾が直接に西欧と接点を持っていた側面、日本語や中国語の資料から浮かび上がるのとはまた違った様相が見えてくる。逆にまた、もし仮に自分自身が当時のロンドンで世界各地の宣教師から送られてくる詳細な報告書を読む立場であったならば、あたかもこれらの資料のみで帝国の広がりや隅々までわかった気になってしまったのではないか、とも感じた。時間に抗し

て現存する資料は（それがあつた特定の意図にそつて保存された当時の情報のごく一部にすぎないとしても）、わかつたつもりでいる過去が、実は全然わかつていないことのほうが多いという、考えてみれば当たり前のことを、否応なく突きつけてくる。PCE/FMCを含めて、ロンドンで閲覧した台湾に関する資料は、日本の植民地支配を世界的な観点から考える契機を与えてくれたように思う。